

# 仏の願い

平成22年 西雲寺だより 立春号(15号)



お釈迦さまが阿弥陀経を説かれた地・祇園精舎

先日、NHKスペシャル「無縁社会」という番組を見て、大変ショックを受けた。不況が深刻化し、派遣労働者の増加と共に、日本も格差社会と化してしまった。

それと同時に、よき日本の社会を築いてきた「三つの絆」が急速に失われてきているという。三つの絆とは故郷との「地縁」、家族との「血縁」、会社との「社縁」である。この三つの絆を失い、都会の片隅で誰にも見取られず孤独死し、身元が分からなかったり、遺族が引き取りを拒否した「無縁死」が年間三万二千人にのぼるといふ。これは人ごとではない。人間社会が崩壊しているのだ。(住職)

## 親鸞聖人の生涯

## 関東移住

## 赦免(しゃめん)と師・法然のご入滅

建暦元年(一一二一)十一月一七日、流罪を赦免された法然上人は京都に戻った。同日付で親鸞聖人も赦免された。法然上人は七十九歳、親鸞聖人は三十九歳であった。一刻も早く師・法然上人に会い、四年の間に自己の内面で深めた信心が法然上人の教えの核心に沿うものであるかどうか確認したかった。しかしそのわずか二ヶ月後の翌二年一月二十五日、法然上人は世を去ってしまった。再会の望みを心の支えにして辛い流罪生活に耐えてきた聖人は、その支えを一気に失ってしまったのである。悲歎にくれながら、しかし聖人はやがて一歳になる信蓮や妻惠信尼と共に、今後いかなる道を選ぶべきかの新たな決断を迫られることとなった。結局その後二年程越後にとどまって関東に移住するのであるが、その間一時京都へ戻ったとする説と、都へは戻らず直接関東に向ったという二つの説がある。後者の説が有力であるが、仏光寺派では一時帰洛説をとっている。仏光寺の『御伝鈔(ごでんしょう)』では、聖人四十歳の建暦二年八月二十一日から十月までの約二ヶ月間、京都に戻って法然上人のお墓にお参りし、山科の地に一寺を建立したと記されている。興正寺と名付けられ、仏光寺の草創と伝えられている。

## 関東移住の理由

ではなぜ関東移住を決意されたのでしょうか。様々な説があります。

第一に法然上人が亡くなって京都へ戻る理由が無くなったこと

第二に法然上人に「没後二箇条之事」というご遺言があり、その第一条に「自分の死後、弟子たちは京都に集って来てはならぬ」と戒めておられること

第三に恵信尼公の父、三善為教(みよしためり)の所領が常陸(茨城県)にあったこと  
第四に越後の農民が、関東にかなり移住していたらしいこと。

第五に『教行信証』御執筆のため

これらのいくつかの条件が重なって、関東移住を決意されたと思われるが、『御伝鈔』に、

もしわれ配所におもむかずば、何によりてか辺鄙(へんび)の群類を化せん、これなお師教の恩致(おんち)なり(もし私が越後に流されなかつたら、都から遠く離れた田舎で苦しい生活をしている人々にどうして教えを伝えることができたでしょう。これもひとえに師・法然上人のおかげであります)

とあるように、関東という全く新しい地に念仏の教えを広めることが法然上人のご恩に報いることであるとお考えになったことと、五番目の『教行信証』のご執筆が大き

な理由となったことと思われま

す。『選択集(せんじやくしゅう)』が刊行されるのですが、直ちに華嚴宗の僧、明恵(みょうえ)が「摧邪輪(さいじやりん)」を著し、激しくこの『選択集』を論難してきたのです。その最も主なることは、法然上人が浄土宗には「菩提心を必要とせず」とされたことに對するものであります。これを受けて法然上人の専修念仏の教えをめぐって是非の論が渦巻き、都は騒然とした状態になっていたのです。承元(じょうげん)の法難が起こったのも、『選択集』が南都北嶺の聖道門仏教に受け入れられなかつたからであり、今また都では『選択集』が論難されているのを知らされて、親鸞聖人は法然上人の「専修念仏の僧伽(さんか)」に加えられた者として、深い責任感と使命感をかみしめられたことと思われま

す。聖人は師・法然上人が著された『選択集』が末法の世にすべての人々が救われるまことの仏道を明らかにしたものであり、またどのような論難にも耐えうるものであることを明らかにしようと思われて『教行信証』の執筆を思い立たれたと思われま

す。聖人は越後でも經典の抜き書きはされていたと思われま

たのです。聖人にとって関東は『教行信証』著述にふさわしい地であったのです。当時の関東は、鎌倉に幕府が開かれ、革新的の気分が満ちており、宗教的にも不毛の地でなく、善光寺の念仏聖（ねんぶつひじり）たちが行きかい、聖徳太子を崇める太子信仰が浸透していた地でもあったのです。

### 関東への旅立ち

関東への道のりは、善光寺、そして上田、小諸、軽井沢から碓氷峠を越え、群馬県高崎市附近から関東に入られた、つまり現在の信越本線沿いの旅だったと想像されます。この時聖人は妻惠信尼と二人の子供の手を引いての旅であったのです。当時僧が妻や子供を連れて旅をするなど信じられないことでした。肉食妻帯をせず修行の身であったこそ、僧は尊敬されていたのです。それなのに半僧半俗のような姿で妻子を伴って



旅をするなどは、破戒者が旅をしているとしか見えなかつたと思われれます。周りの人々の冷たい視線をあげながらも、聖人の非僧非俗として本願念仏の仏道を歩むという信念はゆらぐことはなかつたのです。

親鸞はまず信濃の善光寺に参詣します。この善光寺の本尊、一光三尊仏（弥陀・観音・勢至）は、日本に最初に伝えられた仏像であるといわれ、聖徳太子と共に念仏者を必ず救うと信じられ、庶民の間に広く浸透していたのです。堂内に入ると、かつて親鸞聖人も行っていた不断念仏の音が響いていて、懐かしい思いに駆られたことでしょう。



善光寺前立本尊

親鸞聖人は晩年、善光寺如来和讃を五首作って、

善光寺の如来の、われらをあわれみま  
しまして、なにわのうちに来たります  
（善光寺の阿弥陀如来は、私たちを憐れ  
み救うために、百済（くだら）（朝鮮半島  
の国）からはるばる日本の難波（なにわ）  
（大阪）の港に渡ってきてくださった）  
とうたっておられます。

また『御伝鈔』には、親鸞聖人のお姿を  
描こうとした絵師が「夢にみた善光寺本願  
の御房（おんぼう）とそっくり、生身（しょうし

ん）の弥陀如来にこそ」と言つたという話が  
しるされている。

### 三部経読誦

一行が上野国（こうずけのくに）（群馬県）の  
東南端、佐貫（さぬき）にさしかかつた頃、  
飢饉に苦しむ人々の惨状をまのあたりにし  
た。行き別れや死体の山、物乞いして聖人  
にすがろうとする人々、しかし施す何もな  
い、とつさに思ったことがこの人々のため  
に『大無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』  
を千部読もうということであった。このほ  
かには何もできることはなかつたのである。

妻の惠信尼は後に末娘の覚信尼に宛た手  
紙のなかで、「さぬきと申すところにてよ  
はじめて、四五日ばかりありて、思いかえ  
してよませ給わで」と記している。経典を  
読んでその功德によつて苦しんでいる人々  
をたすけようとするのは自力である。本  
当に他力を信ずるのであれば、人々に如来  
の本願とお念仏の信心を説くべきである。  
自ら弥陀の本願を信じ、人を教えて信ぜし  
めることが仏恩に報いるまことの道と教え  
られていたにもかかわらず、本願名号のほ  
かに何の不足あつて経文を読誦しようとし  
たのか、私には人々を救う力など全く無い  
のだ、すべてを私を生かして下さる阿弥陀  
如来におまかせすればよいのだ。自力の執  
心の離れがたきを思い知らされて、三部経  
読誦を中止したという。「ただ念仏して弥陀  
にたすけられまいらすべし」というよき  
師・法然上人の教えに立ちかえつて、再び  
常陸国へと足を運ばれたのでした。（住職）

## 常森地区 昔の思い出

去る十一月二十三日秋廻りの報恩講がありました折、西雲寺だよりに常森の昔の事等寄稿してほしいとの事でしたので、昔を思い出して筆をとりました。

常森地区では、昭和四十年頃から若い人の勤めの関係で当時の福井市を始め地区外に転居するようになりまし。昭和五十六年の豪雨災害による河川改修を期に戸数は激減し、現在は僅かしか住んでいませんが、昔は二十戸以上あり、上垣内、西垣内、下垣内と三班に分かれ、秋廻りの報恩講も三日がかりでした。西雲寺の前住職と重誓寺の前住職と二人で夜は法話もあり、多数の在所の方々がお参りに来て大変賑やかでした。

又当時毎月二十八日はお講様の日として、お講如来様を順番に持ち廻りして、在所の方皆でお経をあげ終わると山菜料理で皆で楽しく歓談した事、又常森神社の境内で相撲大会を行い、川西地区等地区外から多数の力士が参加して境内が一杯になり大盛況でした。

当時は娯楽もなくテレビも普及してない時代でしたので、私の家で冬の休閑期に一、二回、麻雀大会を五、六卓用意して楽しんで事等思い出は尽きません。

又西雲寺前住職には大変お世話になり、私が初年兵で鯖江の連隊に入隊した時、三中隊の宿舎迄何回も来て戴き、何かほしい物があつたら言いなさいと親切におっしゃって下さいました。初年兵は自由がきかない事を察してくださった其の気持ちが大変うれしく、今でも忘れら

れません。

又兵舎前の広場に各中隊が集合したとき、馬上から抜刀して当中隊の指揮は護城中尉がとると大きな声で胸を張って号令をかけた事等、今でもはつきりと思い出されます。

## 常森地区の生い立ち

西暦一一八〇年、現在より八三〇年前、平家は加越国境の俱利伽羅峠の決戦で源氏に敗れ、加賀越前の海岸に沿ってのがれ、漸く棗海岸(現在の柳原付近)に到り、そこで二手に分かれ、一隊は本郷地区の奥地に向い、東平、猫瀬、奥平、中平、清水平に隠れ棲んだ。他の一隊は糸崎海岸で船を雇って鮎川に上陸し、人々の案内を受けて現在の国見町の峡谷に入り、平清盛の弟である平経盛もり以下の将兵が、常森を始め長尾、獅々口、小糸、長原に隠れ棲んだ。現在の地名は主な武将の名前をとったものであり、経盛は源氏の探索が厳しかった為常森と改めた。これらの歴史は、後生の参考になればと思い、史実に基づき記述しました。



福井市国見町 森本 守

### 山門揭示板



罪悪深重（さいあくじんじゅう）というのと、私  
たちはもう一つ罪ということがはつきり  
しない。自分は何も社会や人に迷惑をか  
けていないし、全うな人生を歩んでい  
ると思つています。仏教でいう罪悪とは法  
律または道徳の世界をいつているのでは  
ありません。それは如来さまの智慧によ  
つて照らし出された心の深い闇の世界を  
指しているのです。それはどこまでも自  
分に執着する自分がかわいいという我執  
によつてしか生きられない私たちが在り  
方をいつているのです。  
私たちが自分がかわいいが故に、他人  
の幸せを素直によるこぶことができませ  
ん。他人の不幸を悲しむことができず、  
他人の不幸と比べて自分の幸せを感じて  
しまうのです。罪悪深重、お恥しい私の  
すがたです。（住職）

### 先輩の感動をたずねて

正信偈では、ずうつと光の名前が続いていま  
が、僕はついこう思つてしまいます。「そりやあ親  
鸞聖人は偉いから仏さまの光を感じられたんや。い  
くら全ての人を照らしてつて言われても、僕は全  
然感じんわ」と。  
仏の働きを感じる、このことが本当にナゾなんじ  
やないでしょうか。仏さまと自分と、一体どこに接  
点があるんでしょう。仏の光とか働きとかがおとぎ  
話じゃないつて、どこで言えるんでしょう。  
大先輩・親鸞聖人は、仏を信じることを「信知」  
とも書かれます。ハッキリ知ることが信心だとおつ  
しやるのです。それに、先生である法然上人の信心  
も自分の信心も全く同じだと言われます。誰の信心  
もみな仏さまからのいただきものだからだと。  
そうすると、親鸞聖人は決して特別な人じゃない  
んです。彼がハッキリ知つたと言われるなら、こ  
の僕も感じられるつてことなんですね（编者）

ちようにちがっこうしょうじんせ  
**超日月光照塵刹**  
いっさいぐんじょうむこうしょう  
**一切群生蒙光照**  
親鸞作「正信念仏偈」より

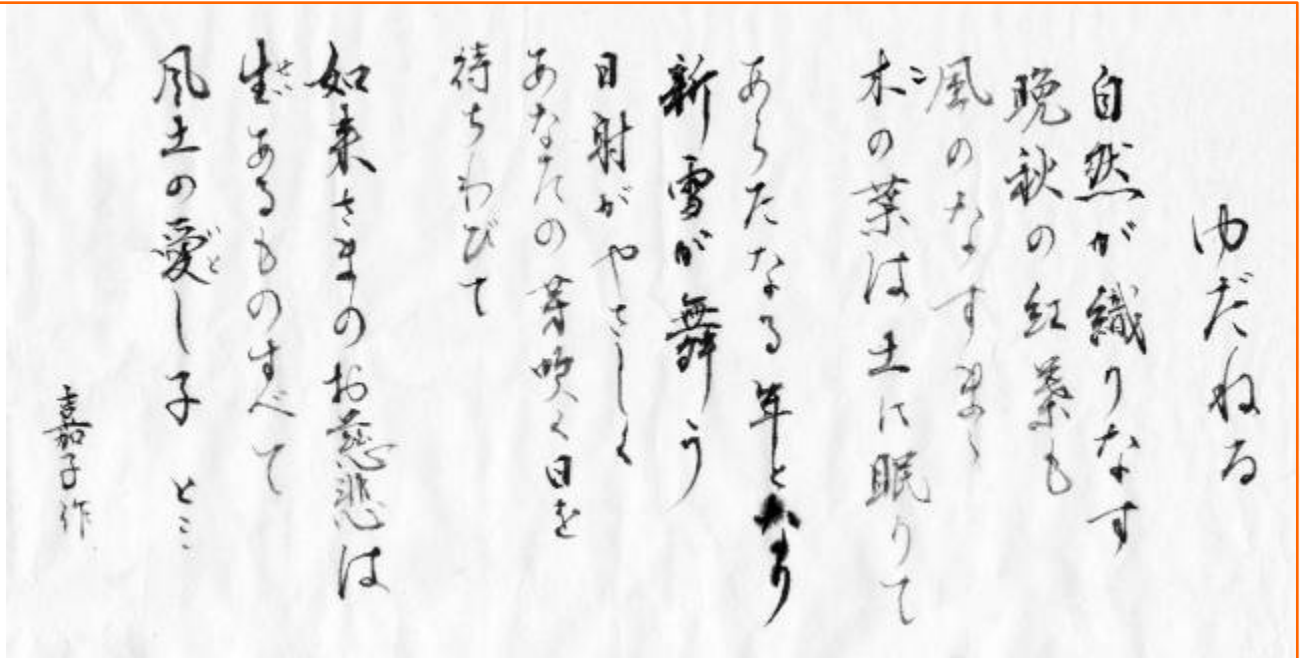
読み方 超日月光(を放つて)塵刹(じ  
んせつ)を照らす。一切の群生、

光照を蒙(かぶ)る。

超日月光 太陽や月の光とは比  
べものにならない明るさ  
のこと。

塵刹 ちりのように無数に散ら  
ばる所。私たち一人一人が  
暮らす環境。

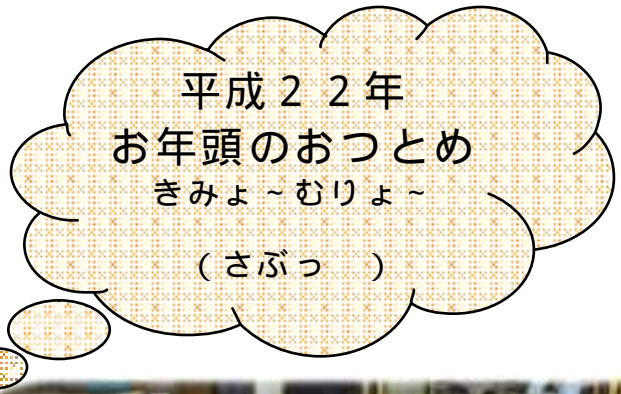
群生 生きとし生けるもの。



(西別所町 渡辺嘉子さんより)



本堂・末の方々



安田の方々



畠中・宿堂・別所・別畑・謡谷・風尾・坪谷の方々

発行

真宗仏光寺派 専念山 **西雲寺**  
 住職 護城一寿  
 筆頭総代 鈴木春夫  
 編集責任者 護城一哉  
 〒910-3523 福井市武周町5-2  
 電話 0776-97-2138  
 メール kmgojo@mx3.fctv.ne.jp  
 ホームページ http://arukou.net/

次世代の方、分家された方に！

お手元に2部届いた時には、ぜひご活用下さい。

みなさんの声 大募集！

原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。